
木 材 と レ ン ガ

北国の住まい相談所長 一 宮 忠 雄

はじめに

根がおっちょこちょいで、なににでも首を突っ込みたがる癖があり、色々なことを手掛けてきました。一番初めがコンクリートブロックで、北海道ブロック建築普及促進協議会といわれている時代から付き合い、現在の北海道メーソニー建築協議会（前記の協議会を改称したもの）まで、参加しています。

そのうち、木材を勉強してみないかと誘われ、北海道木材需要拡大協議会の仕事を手伝いました。全道を視察に回ったり、北海道大学の足立富士夫先生と日高の林業施設（バンガローや休養施設など）を見学したりして、大変楽しませて頂きました。厚岸の林務署の設計もさせて頂いたし、北海道マイホームセンターに建てられた「木の家」の設計もおこない、2年ぐらい、モデルハウスの番人もやりました。お陰で外断熱のことに興味を持ち始めて、北海道外断熱工法協議会の事務局長をやらせてもらっています。今は北海道インテリアプランナー協会の事務局長も兼ねさせてもらっています。レンガ・メーカーの西谷陶業（本社・四国高松市）の顧問でもあります。インテリアは別として、木材もレンガもブロックも斜陽と言われている材料であり、業界では、両方とも新しい方向を探さなければ生きていけない立場に追い込まれていました。何の因果かそういった材料ばかりを扱って、苦労を重ねている人々を見てきましたので、建築材料について色々考えることが多かったのです。そこで考えたことを思い出しながら、インテリアのことを含めて述べていきたいと思い

ます。

いずれも斜陽といわれて

木材もレンガも古い歴史を持っている建築材料ですが、この20~30年、斜陽の産業と呼ばれています。

もともと木材は原始の時代から家を作るのに使われました。その頃は木は有り余り、山も野も木で覆われていました。使いやすく、自然や人間や生き物に優しく、自然に育ち、大きくなり、神にさえなりました。御神木というものは、いずれの神社にもあります。下の写真は、10世紀中期に、平安から鎌倉の時代に栄えた気山津（港のこと）の鎮守として、北陸道随一の神社として延喜式神名帳に記されている、宇波西神社の御神木です。場所は福井県三方郡気山。樹種は杉。地元では



御神木（福井県 宇波西神社）

『おおすぎさん』と呼ばれているそうです。原始の人は役に立つものを敬ったのです。神になる理由としては、その側にいると、靈氣（フィトンチッド？）のお陰で気持ちが清浄になるということもあったのでしょう。

一方、木の少ないところでは、泥を使って日干しレンガを使いました。石を積んだり、岩を切ったりして家や神殿を造りました。そういう土地では、そこから神が生まれました。日干しレンガの後には、普通レンガが造られ始めました。紀元前5,000年頃からです。日干しレンガとは違って火で焼き締めてありますから、形が一定になり生産性が上がりました。焼き締めたレンガは紀元前2,000年ごろからメソポタミアで作られ、建築の主体になっていきました。メソポタミア地方はもともと肥沃な地方で、鬱蒼とした森林に覆われていましたが、なんの原因からか森林がなくなって、荒地になってしまったそうです。察するところによれば、燃料に使ってしまったのではないかと思われそうですが、日本も現在のままでは、この地方の二の舞になりそうです。

何はともあれ、この時代は、木材もレンガも幸せな時代でした。

しかし木材もレンガも明治維新後の日本帝国の高度成長で、木材は伐りつくされ、樹種も減り、人が増えるにしたがって、不足気味になってきて輸入材に押しまわられてしまいました。レンガの方の事情はもっと厳しく、明治維新後の洋風化で生まれましたが、関東大震災で頓挫し、戦後一時期の木材不足時期に蘇りの繁栄の時期を迎えましたが、長続きせず、またも日の目をみなかったのです。

国策にもあそばれて

戦後、戦争中の濫伐と植林の作業員の不足から森林は荒れ放題になってしまいました。それに加えて、空襲と住宅の老朽化で国土は荒れ果ててしまいました。戦後の復興はまず住宅の建築から始まったのです。北海道は政府の政策で、残された食料基地、エネルギー基地として脚光を浴びはじ

めたのです。それまでは北海道全体が植民地で、戦争の前線基地のみの評価だったのですが、米と魚の食料基地であり、石炭のエネルギー基地として再評価され始めたのです。そのためには二つの基地で働く人を集めなければなりません。

植民地から帰国した人、戦災で住む家を無くした人たちが目を付けられました。家が無ければ人はきません。受け入れの最初の課題は住宅建築です。木材は極度に不足してしまっていたので、掘り立て小屋しか建ちません。板一枚の小屋では、いくらストーブを焚いても間に合いません。朝、起きると布団の寝息の掛かる部分がシバレついていた。

北海道庁の建築担当者には中国の東北や樺太の引揚者も多かったわけですが、その人たちが民間の移住農民と一緒に、火山礫（軽石状になった火山噴出物）に石灰とほんの少しのセメントを混ぜてブロックを作り始めました。火山礫は北海道に無限にありました。北海道庁はブロックの製造を支援し国を動かして、他に例の無い「北海道寒地住宅等建設促進法」を作りました。この法律によって政府資金を使用する建物については、すべて簡易耐火構造以上、つまりブロック以上の構造としなければならなくなりました。その期間が昭和27年から昭和45年まで、約20年間続いたのです。そして住宅金融公庫の資金を使う戸建住宅では、全部といってよいほどブロック造で建てられたのです。

これはブロックやレンガなど土を使った建築にはまたとない良い機会だったのです。日本に始めて土を使った建築が定着できるのかと、みんなが考えました。その時代ブロックは個数にして3,000万個を超えました。ブロックの三角屋根は北海道の住宅の代名詞のようになりました。

そのころ荒れた森林も復興のための植林が始められました。成長が早く炭坑の坑木や足場丸木になるということで、長野県からカラマツが移入されました。伐採された山には、ほとんどカラマツが植林されました。北海道の民有林は、どこもカラマツ一色に埋められました。

北海道はいつでも、どこでも官主導です。官が言い出せば、全部従います。お上が「これをやろう」といえば、何はさておいても、それに従います。これは明治時代からの因習で、最初に苦労せずして土地をもらったことに原因があります。土地は一所懸命と昔の人が言っているように、命を懸けるほど大切なものだったのです。そこでお役人のいうことを聞いていれば、何かもらえるという根性が身に染みついてしまったのです。

ブロック・レンガ・木材もご多分にもれず、官に頼って、官のいうままに生産し、官に見放されて右往左往しているのが現状です。

ブロックは昭和45年寒住法の一部改正で、政府資金が木造にも適用されるにつれて、3,000万個が800万個に激減してしまっただけで、カラマツ植林は炭坑の不況と、建設業界の技術の変革で使用先が激減し、樹種の変更を余儀なくされたように、役所のいうことでも、通用しないこともあるということが身に染みて分かったのです。

木材は家具や天井・床・壁などの内装材、装飾用インテリア小物など貴重品の分野を目差し、ブロックは新しい外断熱工法を目差して脱皮しようとしています。官はこれらの新しい動きをよくつかんで方向を示してあげる必要があります。

しかし、お役所の一貫性のない政策は、その時々の方針で変更されることがあり、民間の指導者が政策を理解し、行動に移す前に、政策全体が終わりを告げることさえあります。

カラマツ需要対策協が運動を終わったときでも、十勝の農村では、酪農家はカラマツ材で丸太

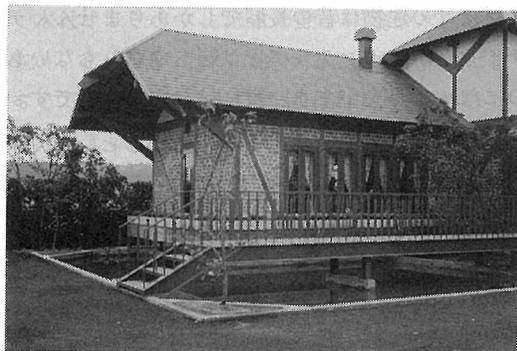


旭川営林支局庁舎

埋め込みの牛小屋を造り、ブロックやレンガとカラマツの組み合わせで農村住宅を数多く造り、それが外断熱建築の発展と浸透に、大きな刺激を与えました。そのカラマツ使用運動の指導者太田龍太郎氏は、官のカラマツへの熱が冷めたところに、忘れた時分に功労者として、道庁から表彰され、「なんで表彰されたのか分らなかった。まさか、カラマツ使用が理由とは」と述べています。民間は地道に運動を続けているのに、おおもとがそれを忘れかけてしまっていたのです。

運動というものは呼び掛けて直ぐ始まるものではありません。次第に浸透し、拡大していくものなのです。運動の実態を考えずに運動の形態だけを考える官庁のやり方には不満を持たざるをえません。

デザインの問題も同じで、火がついたところで熱が冷めるのではなにもなりません。息の長い対応が必要です。一時の思い付きで取り上げるのではなく、長い期間の問題として考えてほしいのです。お役所の行政は、運動の本質をみていない所から始まります。その点、寒地住宅都市研究所も林産試験場も、研究所と名のつく所は長い対応をします。行政に見放されたブロック・レンガも寒研の力によって、外断熱の分野で息を吹き返しております。



四国高松のドライブイン（レンガと木と鉄の組み合わせ）

木とレンガ

木とレンガの組み合わせは、古い時代からありました。

北海道の開拓史時代のレンガ建築や石造の建物は、木造レンガ積みの構造で、建築的というと木造だったのです。鉄筋も入っていないし、木造の軸組がなければ自立しなかったのです。木造の外側に防風や防火のためにレンガや石を積み上げたのです。そのためこれらの構造は東京周辺では関東大震災でほとんど崩れ落ちたのです。残ったのは金に飽かせて造った、東京駅前の三菱のビル街だけでした。1メートル以上と思える厚さのレンガのビルだけが残りました。

本格的なメーソンリー建築（小さな単位のを組み合わせ大きなものを形づくる建築方法）が建てられ始めたのは、戦後のことです。この頃、レンガ業界は旧態依然の鉄筋を入れない形にとられて、時代に取り遅れてしまいました。

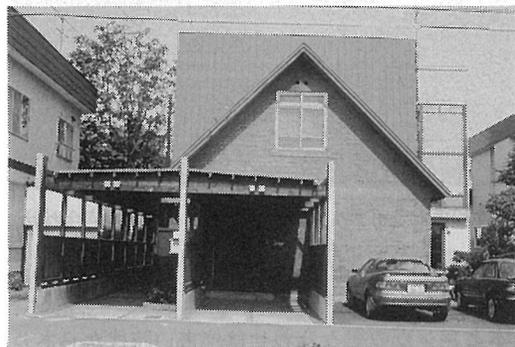
この鉄筋補強の構造になってから、地震には非常に強くなりました。鉄筋コンクリートよりも強くなったのです。

そうなると思いがちで、なんでもかんでもブロックでやりたいという傾向が出てきました。しかしブロックだけでは、住める家にはなりません。ブロックやレンガ、木材だけでは住みやすい家は作れないのです。レンガにしるブロックにしる、それだけでは家にはならないのです。ブロックだけで造った建物は倉庫になってしまうし、レンガだけのものは、牛小屋か豚小屋になってしまいます。木材だけの建物は昔の長屋でしかありません。デザインとか、インテリアとは縁もゆかりもないものになってしまいます。家にはならないのです。例えば木だけでできた家を考えてみると、いくら

複雑な形を考えてみてもシンプルすぎてデザインにならないのです。ログハウスが爆発的に売れないのも、「ときどきは良いけれど、毎日ではかなわん」という建主の気持ちの現れでしょう。玄関だけでも別の材料で仕上げたいとか、壁面に変わった材料を使いたい気がしてくるのでしょうか。つまり需要者の心の中にある多様化の現れです。普及するには大衆のニーズに沿わなければならないのです。

普及するためには、一つの材料では不可能なのです。他材料との組み合わせによって、その特徴が発揮されるのです。

デザインにしるインテリアにしる、材料を複合することによって真価が発揮されるものです。しかも環境重視の今、環境を悪化させない、化学製品でない「ほんもの」の複合が望ましいのです。木とレンガ、木と鉄、木と布、レンガと皮など、「ほんもの」同士の組み合わせでデザインが組み立てられることを願っています。「ほんもの」はゴミにはなりにくいものがほとんどです。今はゴミを作らないことを考える時です。



積雪防止用に使われたガンギ風改修



東北ガンギ風改修の内部

組み合わせのデザイン

二つ以上の材料を組み合わせでデザインする場合、よくアクセントとして使われる材料に木とレ

ンガがあります。この二つの材料はなぜよく使われるのか考えてみたいと思います。

二つの材料には、まず歴史があり、「ほんもの感」があります。五感に訴えるのがデザインですから、見る人に感動を与えなければなりません。重量・軽量感だけでは人を感動させるわけにはいかないのです。その材料の背後に長い年月が感じられなければ人は感動しないのです。感動といて分らなければ、心を引きつけるなものか、と言いつてもよいのですが、じんと心に染みわたるものかが必要なのです。

文章の最初のほうに御神木のことを書きましたが、「自然と頭の下がる感覚」を思い出して頂ければ、はっきりするかも知れません。長い歴史の裏づけがなければ、この感じは出てきません。「ほんもの木」（無垢といいます）とプリント合板を比べるとはっきりしますが、「ほんもの」と「にせもの」はどんなに「にせ」で作っても、はっきりと区別がつかます。

レンガも同じで、いくら上手に作っても薄いタイルと厚みを持った本物のレンガでは、感じが全く違います。これらの違いは素人でも感覚の鋭い人は一遍で、感覚の鈍い人も次第に分かってきます。最近では「まがいもの」が増えて、「にせもの」時代とも言われていますが、このほんもの感は偽ることができません。実在感が勝負になります。



旭川営林支局庁舎内

いっとき美しくても、「にせもの」は次第に化けの皮が剥がれるものです。

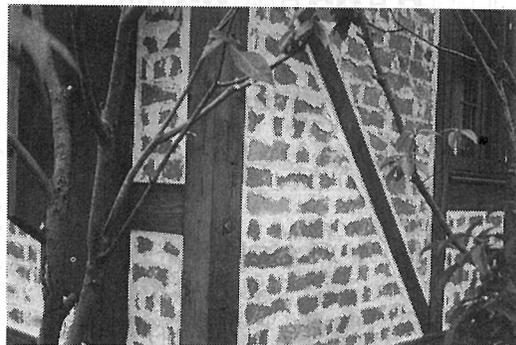
建築は長く美しさを保っていなければならないものです。耐久性が好まれるのも、その理由からです。そういった意味で本物が好まれるわけです。

次に色の問題があります。レンガは焼き物ですから、色に微妙なムラがあります。色彩も原色ではなく中間色が主な色です。掘り出す土によって、発色が自然に違います。それが色の変化を生み出すのです。この変化が生命を暗示させます。いったん生命を持ったことのある木にとって、節や年輪を思わせるこのムラは同化しやすいでしょう。

また、形の問題があります。レンガ造やブロック造などは小さな単位の物を組み合わせ大きなものを形づくる建築方法です。ですから積み上げる方法です。木は天に伸びるものです。この全く逆の材料が建物に変化をつけるのでしょうか。伸びていく材料と土にはう材料との対比がデザインに変化をつけるのです。

一方、インテリアの分野ですが、木の軽量感とレンガの重量感のマッチが、室内に落ち着きをもたらします。昔ペチカが流行した時の感覚が忘れられなかったのでしょうか、いまでも壁体の一部や暖炉などに多く使われています。外国でもこの感じは好まれているようです。東洋風にも使われて、それぞれの国の味を出しています。

木はインテリアには木の節や年輪や木目などを生かして、新しい感覚で使われています。昔はまっすぐで、節の無い木しか使われなかったのですが、いまでは素性の悪い木でも自由に使いこな



四国高松のドライブイン（木部が柔らかさを出す）

し、使いものにならなかった材料でも高価になっている例もあります。また、集成材なども独特な感覚を買われて多く使われ、もはや「にせもの」扱いされなくなりました。インテリアの分野ではすっかり「ほんもの」として定着しています。

デザインとかインテリアデザインといったものは、感覚の問題です。設計事務所のデザイナーは40才をピークにデザイン感覚が摩滅するといわれています。若い感覚のみがデザインを昇華させます。「ほんもの」と「にせもの」を見分ける感覚

も「若さ」です。素材の美しさを生かして「もの」を作っています。突飛とも思える材料も、彼らに任せると自然になります。自然にデザインされます。これからは建築のデザインもインテリアデザインの分野も若い力が期待されることです。木とレンガの組み合わせも、若い彼らにいろいろと考えてもらいたいものです。

(北海道外断熱工法協議会、北海道インテリアプランナー協会事務局長)

日本の 木のおもちや 木の具展



8月8日(土)～9月27日(日) 9:30～17:00 入場無料

旭川市西神楽1線10号

林産試験場
木と暮らしの情報館

ウッド・サマー・フェスティバル

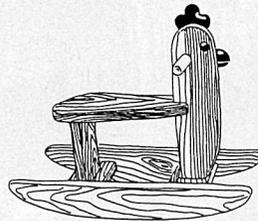
8月22日(土)・23日(日)

- 木で遊ぶ木工教室
- 木っば市

他、盛りだくさんのイベント

日本全国の伝統的な
おもちゃ、動くおもちゃが
音の出るおもちゃが集まります。

MOKUBA



問合せ場所 社団法人 北海道林産技術普及協会
☎0166-75-3553